

発 明 文 化 論

〈第 47 回〉

丸山 亮

マイブリッジの連想

エドワード・マイブリッジという写真史、映画史に名を成した人物がいる。5月にサンフランシスコを訪れた際、現代美術館をのぞくと、常設展と並んで折から開催中の「ヘリオス：変革の時代のエドワード・マイブリッジ」と題した企画展示がことのほか興味を惹いた。エジソンに先立つ初期の動画の発明者として、馬が疾駆する場面をとらえた連続写真などがあり、また、サンフランシスコの町が発展していく様子がうかがえる迫真の風景写真もあった。その写真家の腕前は、19世紀の後半、すでに完成した職人の域に達していたといえる。また、1868年のサンフランシスコ地震で傾いた家の写真を残すなど、記録家としての仕事も先駆的だった。

後になって知ったことだが、マイブリッジが馬の疾走をとらえたのには面白いエピソードがある。実業家で元カリフォルニア州知事のスタンフォードから、ギャロップの馬の脚4本がすべて地面を離れる瞬間があるかどうかの議論に決着をつける証拠写真の撮影を依頼された。マイブリッジが採用したアイデアは、馬の走路を横切る12本の糸を張り、それを横に並べたカメラのシャッターと連動させて、走り抜ける馬の一瞬、一瞬を順次撮っていく、という素晴らしいものだった。そして電気技師の協力を得ながら電動シャッターを採用することで、1000分の1秒以上の高速シャッタースピードを実現し、今日のストロボ写真の様な連続写真を得た。それは馬の4本脚がある瞬間にはすべて地上にあることを明瞭に示すものだった。マイブリッジはこれをもとに改良を加えたゾープラクスコープという装置でシカゴ万博に動画の展示も行っている。

マイブリッジのエピソードはそれにとどまらない。1874年、妻の愛人を嫉妬から射殺するという事件を起こす。いまでは考えられないことだが、裁判では正当防衛として無罪になった。

百数十年を経た今日、このマイブリッジと現代日本との間に架橋を試みる映画作家が現れた。おびただしい手描きの原画によってアニメーション映画を作る山村浩二だ。彼の最新作「マイブリッジの糸」という短編アニメを東京都写真美術館ホールで、制作過程を紹介するドキュメンタリーを挟んで、2回、繰り返し見た。

題名中の糸は、マイブリッジが連続写真の撮影に採用した糸であるとともに、マイブリッジという人物が誘う連想の糸でもある。現代日本を代表するのは母と娘で、その平穏な日常風景は、マイブリッジが当時好んで撮影した被写体だったようだ。親子の顔はしばしば時計の文字盤で表されていて、時の経過がこの短編の主要なテーマになっている。

映像は、張られた糸を押して馬が走り抜けるさまや、ピストルを持った男が一軒家に向かって行き、マイブリッジの殺人が暗示される場面などもある。それと交差するように、現代日本のピアノを習う女の子や母親の胸に抱かれた娘が丁寧に描かれた絵が動いていく。背景の音にはバッハの「音楽の捧げもの」曲集中の「蟹のカノン」という技巧的な曲が使われている。回文のように前後を逆にしても意味のある文になるような旋律が順行、逆行を重ねた2声で進行する音楽だ。そのほか録音テープの逆回しのような音も聞かれ、作者の遊び心が随所に感じられる。最初に見たときには気付かなかった細部に、2度目には気付かされたところもある。

マイブリッジという歴史上の人物が、時差を置いた連続写真と原画のずらしによるアニメ作法との共通性を通じて、今日の日本にどんな知的刺激を及ぼしたかが知られる面白い体験だった。

(まるやま りょう 共生国際特許事務 弁理士)